

Title	初期アジア主義についての史的考察(1)序章 アジア主義とはなにか
Author(s)	狭間, 直樹
Citation	東亜 (2001), 410: 68-77
Issue Date	2001-08
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/122326">http://hdl.handle.net/2433/122326</a>
Right	© 2001 霞山会
Type	Journal Article
Textversion	publisher

# 序章 アジア主義とはなにか

狭間直樹  
(京都大学名誉教授)

二十一世紀において、世界に占めるアジアの比重がいや増すであろうことは、だれしもの予想するところであろう。かつてアジア主義なるものがさかんに唱えられたことは、比較的よく知られたことではないかと思う。

西洋文明を軸とする地球世界の近代的再編の段階において、アジア主義の誕生は不可避なものだった。ということは、その誕生と変遷そのものの内に、近代におけるアジア、とくに東アジア“文明”圏の特質のある一面が映し出されていたということなのである<sup>1)</sup>。敗戦前のわが国において重要な思想潮流でありつづけたアジア主義を、歴史的に考察しておくことの必要性は、新しい世紀を迎えた今、より大きくなっていると考えられる。

## 一、アジア主義の成立基盤

現在では、アジアの地理的概念はだれしもにとって、疑問の余地なく明白なものである。それは、地球儀や世界地図などはもちろんのこととして、人工衛星から見た画像によっても、日々に人々の脳裏に焼き付けられている。しかし、地球を五大洲に区分して全的に把握するという世界認識の方法は、その出発点を大航海時代にまで遡りうるにしても、実際的には近代におけるヨーロッパの世界支配とともに始まり、ここ一、二世紀の間に定着したものである。

有史以来、地球上のそれぞれの地域は自分たちを中心とす

るそれぞれの“世界”<sup>2)</sup>をもっていた。辞典的知識によれば、アジアの語源は、アッシリア語のアスー(assu、日の出の意)、そしてヨーロッパの語源は、セム語のエレブ(ereb、暗いあるいは日没、の意)から出たものだという。つまり、古代文明の中心である“オリエント世界”からして、日の没するところ(ギリシャの地域)がヨーロッパであり、それと相関する概念として日の昇るところ(アッシリアの地域)としてのアジアがあった。古代文明の中心である“オリエント世界”と、それに区別される“暗い”地域との区分が、今の地理的概念に拡大して用いられるようになったのである。

ゆえに、アフリカ洲・南北アメリカ洲・オセアニア洲が明確に他から区分された地形を持つものであるのたいし、ユーラシア大陸だけは地上の線引きによって、アジア洲とヨーロッパ洲に分けられているのである。というより、両洲を載せる大陸が地形的には一つのものであることが自明なので、地理学的にユーラシアなる合成名称が必要になったわけなのである。

よく知られているように、近代以前の日本人にとって、世界はヤマト(大和)・カラ(唐)・テンジク(天竺)であり、中国人にとってのそれは即中華“世界”のことにほかならなかった。有名な話だが、清末の最高の知識人の一人である梁啓超でさえ、十八歳の時(一八九〇年)に上海で『瀛環志略』

を買って読み、そこで初めて世界には「五大洲と諸国があることを知った」という<sup>3)</sup>。徐繼畬の撰にかゝる『瀛環志略』は、幕末の日本で翻刻され、魏源の『海国図志』とともに、維新に大きな影響をあたえた書物なのだが、他地域・他文明と対比して自己を相対化する過程において、“アジア”認識が明確化していったのである。

つまり、中国や日本がアジアの一員であるとの意識を持つにいたるのは、ヨーロッパ人が非ヨーロッパ人、ないし非キリスト教徒居住地域(ユーラシア大陸の東方部分)をアジアと区分し、近東からはじめて、しだいに極東にまでつきつきと圧迫をくわえてきたからである。ここにヨーロッパの進出(侵略)に迫られ自らの存在を認識させられたことにより、近代における“アジア”の概念が生み出されたのだ。その結果として、“ヨーロッパ主義”なるものの内容が問われることがないままに、ヨーロッパに對抗的に自らの存立を主張する“アジア主義”が形成されることとなった。日本や中国にとってのアジア主義の立脚基盤は、このように世界史の一定の発展段階とふかく結びついて誕生したものであったのである。

アジア主義が先進的なヨーロッパのアジアへの進出(侵略)と結びついたものだったとしたら、その根柢において必然的にヨーロッパに對抗しようとする思想的“対立”構造を内包

するものとなるであろう。その「対立」構造の一方の極は、アジアの地縁的・文化的同質性における提携・連帯となるであろう。くわえて、進出（侵略）の結果としての滅亡を免れるためには、アジアはヨーロッパの先進性（富強）を撰取せねばならない。つまりアジアの側は、ヨーロッパにたいする地理的・空間的な対抗関係という基盤のうえに、ヨーロッパのもつ富強を将来において達成しようとする「追隨」的路線を行なうべきであった。アジア主義は、そのような錯綜した二重の関係性のうえに、形成されねばならないものだったのである。

かくして、ヨーロッパに対抗し、団結・提携しようとする興亜主義、いわゆるアジア主義が登場することになるが、このときに唱えられた団結・提携は、論理的にも実際のにも、アジア内部における対等の関係を前提にしたものでなければならなかった。出発点におけるアジア主義はこのようなものだったのである。

ところで、富強追求の路線においては、アジア諸国の団結・提携を維持しつつ、その路線をすすむのかどうかの問題が出てくる。したがって、早くに「維新」を達成した日本において「脱亜」による先駆けの論が唱えられたのは、ある意味で自然なことだった。問題は、先駆者が抑圧者になりかわるのかどうかにあったはずだが、日本のアジア主義はアジア諸国

対等の団結・提携をなげすめて、基本的に日本の優越を軸にしてその進出（侵略）を支えるものになりかわっていくことになる。

## 二、アジア主義史の時期区分

アジア主義の史的展開の表面的な終末が、日本の「大東亜戦争」すなわち第二次世界大戦の敗北にあることは、ほぼ認められているのではないかと思う。しかし、その出発点をどこから説きおこすかはいささか難しい問題であろう。近代における西力東漸を発生基盤と位置づける本稿の立場からすれば、幕末における吉田松陰の海外雄飛論などから始めることも一つの方法である。しかし本稿では、そのような思想的なアプローチをしばらく置き、明治十三（一八八〇）年のアジアの提携振興をめざす団体、興亜会の成立から始めることとする。そして、最初にその中心人物の一人である曾根俊虎と、興亜会の準備的組織の位置にある振亜社について考察をくわえることにする。

ちなみに、興亜会はアジア全体を視野におさめて構想されたものだったが、実質は中国との関係を主とするものだった。くわえて、筆者の力量の問題もあって、本稿の考察が中国を中心としたものになることを、はじめにお断りしておく。

一八八〇年から一九四五年の敗戦まで、六十五年間のアジア主義の歴史を、本稿では、初期・中期・晩期の三時期に区分することにす。初期には、国家（とくに日清兩國）間の関係が基本的に対等だったものが、中期には、列強間の協調の枠をまもりながら日本の優越を軸とするものに変わり、晩期には、日本を頂点とし日本の利益だけをめざすもの（その点では本来のアジア主義の本質を失っているのだが）へと変わっていく。

このような三時期の劃期は、大きくは政治状況の変化に対応したものである。初期から中期への劃期は一九〇〇年、義和團事件と八カ国連合軍の共同出兵である。その直前から始まったいた租借地獲得、勢力範囲分割（瓜分）合戦は、共同出兵と北京議定書（辛丑条約）締結で新段階をむかえ、日英同盟、ロシアの満州占拠、日露戦争へと推移していく。日清戦争という兩國関係の根本的変化をもたらした大事件を劃期とせぬことを不審に思われるかもしれないので、具体的な説明はのちに譲ってここで一言断れば、アジア主義の変容には、他の諸事象と若干のタイムラグがあったのであって、そこに東アジア史の文明史的特色の一面を見ることになるだろう。

中期から晩期への移行の時期は、一九二八年の第二次山東出兵にもとめたい。このとき、在留邦人の安全のための緊急「自衛」措置として、出兵が現実に行われ、そこから済南事

変の発生となったのだった。日本は国際法を無視して、みずからが必要とする場で、必要とする時に、中国にたいして「事変」と称する戦争を行い始めたのである。

これは日本の対華政策の質的飛躍を示すもので、列強との協調をも放棄してみずからの利益を求めようとしたものだった。一九三一年の「満州事変」と称する東北地方占領と傀儡国家の建設、一九三七年の「北支事変」から「支那事変」と称する全面戦争への突入はその延長線上にあった。このような状況下において、団結・提携をもとめるアジア主義が、ほとんど実質的な意味をもたぬ、コトバだけのものと化したことは、言うまでもない。

本稿は、その第一の時期、初期のアジア主義について、埋もれた歴史をできるかぎり発掘し、歴史的に考察を加えようとするものである。初期のアジア主義がもっていたいろいろな可能性を押さえておくことは、後の展開を検討するために必要な前提であることは、言うまでもないだろう。

この時期の末期、一八九八年に東亜同文会が成立する。その成立は初期と中期を区分する重要な指標であっただけでなく、その歴史的な役割はむしろ中期での牽引車としてのそれにあった。本考でも、第一の時期の帰結としての東亜同文会については、必要なかぎりの言及を行うことにする。本稿の章構成の概略は、以下のとおりである。

- 第一章 曾根俊虎と振亜社
- 第二章 興亜会について
- 第三章 亜細亜協会について
- 第四章 東邦協会について
- 第五章 東亜会と同文会
- 第六章 善隣義会について
- 第七章 善隣訳書館について
- 終章 初期アジア主義の歴史的意義

— 東亜同文会の成立をめぐる —

### 二、アジア主義の研究史

「アジア主義」の研究史を問題にするばあい、まず挙げられるべきは竹内好氏の「アジア主義の展望」である。それは、竹内自身の編集にかかる『アジア主義』<sup>10</sup>に付された解説の文章なのだが、戦後において言論界・学術界の目をアジア主義に向けさせるうえで決定的に重要な役割をはたした。きわめて啓発的な刺激をたくさん盛り込んだ文章であって、いまではその重要性に鑑みて、松本健一氏による『竹内好「日本のアジア主義」精説』<sup>11</sup>なる周到な解説本も出されている。

竹内氏によれば、アジア主義の内容は千差万別、「膨張主義または侵略主義と完全には重ならず」、「ナシヨナリズム

(民族主義、国家主義、国民主義および国粹主義)とも完全には重ならない」。しかし、同時に「それらのどれとも重なり合う部分はあるし、とくに膨張主義とは、大きく重なる」とも言われる。比較的近い関係にある諸主義との対応関係をこのように説明することにより、かなりイメージしやすくなることは確かである。しかし、初期のアジア主義は、如上の内容を基本にしていたとは思えない。くわえて、「アジア主義は、ある実質内容をそなえた、客観的に限定できる思想ではなくて、一つの傾向性ともいふべきもの」となると、なお賛成しかねるのである。

上の文段で引いた見解を補って、竹内氏はこうもいわれる。「もっと正確にいうと、発生的には明治維新革命後の膨張主義の中から、一つの結実としてアジア主義が生まれた」と。これについては、もう少し詳しく説明を加えておられるが、ごく大雑把にいうと、この見解も初期アジア主義についての考察からすると、その実体に合わないところが多すぎると思う。「膨張主義の中から……アジア主義が生まれた」というより、アジア主義の一つの側面として膨張主義が随伴して生じることとなった、というべきではないかと思う。

さらに同意しかねるのは、アジア主義を史的に叙述できると思うのは、「たぶん歴史主義の毒におかされた偏見だろう」との竹内氏の意見である。歴史的に出現し展開した「主義」

が、たとえ心情的な面がいかに大きいものだったとしても、史的に叙述できないはずはないのではないか。竹内氏の研究に多くをまなびながら、本稿をあえて公にする所以である。

いろいろと批判を記したが、竹内好氏によって、アジア主義研究の道筋がつけられたことは、いくら高く評価してもしすぎることはないだろう。竹内氏とともにその方面の仕事をされたのは橋川文三氏だが、氏の一九六〇年代の関連文章は「脱亜論以後」との副題をもつ『順逆の思想』<sup>12</sup>に収められている。

ほかに、橋川氏の研究で触れねばならないのは、『黄禍物語』<sup>13</sup>である。黄禍論は、今では学問的にはまったく問題にされなくなったが、実際にはまだまだ生活のすみずみにまで染みついていて人種「学説」と密接な関係をもつものである。十九世紀末から二十世紀初にかけてかなりの流行をみた黄禍論は、文明の発展段階と人種の優劣を結びつけてヨーロッパ白人人種による他地域有色人種にたいする支配の合理化・正当化がはかられたがゆえに、黄色人種の興隆はヨーロッパへの復讐としての「黄禍」と観念されねばならなかったのである。

さきに、ヨーロッパ主義はないのにアジア主義はあると言ったが、黄禍論は、アジア主義が極めて歪められた形で反映された「ヨーロッパ主義」だった、と言えるかもしれない。少なくとも、それが十九世紀末からヨーロッパでにわかを高揚し

たことのように、アジア主義をもふくむアジアの覚醒が影をおとしていることだけは、疑いようのないことなのである。

以下に、初期アジア主義に関連した個別研究をいくらか挙げておこう。

一九七〇年代には、今では古典的な位置を占める酒田正敏氏の『近代日本における対外硬運動の研究』が刊行された<sup>14</sup>。いちいち挙げるが、以後の研究や著作でこれに依拠しているものは多い。曾根俊虎を精力的に研究された佐藤茂教氏は、明治初年の政局と関連させた大胆な推論を発表された<sup>15</sup>。また、安岡昭男は東邦協会についての研究を発表された<sup>16</sup>。七〇年代には、この方面の研究が一挙に活気をおびたかの観がある。

一九八〇年代に入ると、中国史の側からは伊東昭雄氏の一連の研究が出た。いずれも有用の労作であるが、本稿に特に関係するものは、「明治初期の興亜論について」<sup>17</sup>である。多くの啓発を受けたが、観点の違うところを二つ、挙げておきたい。一は、大アジア主義が日本人の歴史的経験の重層から発するもの(五十八頁)とされるのにたいし、私は基本的に近代の所産であると考えていること。二に、「興亜論」の対立概念は「滅亜論」であって「脱亜論」ではない(八十三頁)、とされる点である。

たしかに、語義的には「興」にたいするものは「滅」であるが、前述した富強路線（発展方向）の面において比べるときは、対等の関係を維持しての「興亜」と、抜け駆けの「脱亜」が対立概念となるのである。実際、福沢諭吉の「脱亜論」が書かれた頃には、興亜論の優勢な風潮に抗して、『時事新報』紙上には、興亜会に対抗する「脱亜会」創立の必要が、叫ばれたりもしていたのである<sup>10</sup>。そして、脱亜論の一部はやがて滅亜論に行き着くことになる<sup>11</sup>。

一方、日本史の側からは黒木彬文氏の精力的な業績が積み重ねられ、一九九三年、鱗沢彰夫氏との共編になる『興亜会報告・亜細亜協会報告』<sup>12</sup>の刊行にまでいたる。この資料集は両期的なもので、『興亜会報告』全二十五集、『亜細亜協会報告』二十三篇（第二報を含む）、「規則」七種、名簿五種等の貴重文書にくわえ、編者両氏の周到な解説を配したもので、この方面の研究にきわめて大きく寄与したものであった。

一九九〇年代では、並木頼寿氏の興亜論を中国側の評価と結びつけた周到な研究が発表された<sup>13</sup>。これは『循環日報』を丁寧に読み込んだ力作だが、当時の興亜論を「独善的」とされる結論には、賛同しかねるところがある。また、中村義氏の長年の研究が『白岩龍平日記』の刊行となって結実し<sup>14</sup>、中国人の新鋭研究者趙軍氏の著作『大アジア主義と中国』<sup>15</sup>が出版された。さらに、菅野正氏の上海亜細亜協会について

らない。明治初年以來の日本と大陸との関係は、この時点で、両書のような分析と評価が与えられたことは、その評価への賛否とは無関係に、アジア主義史の研究にとって計り知れぬ価値があるのである。

なお、単行の伝記で是非、挙げておきたいのは、上村希美雄氏の『宮崎兄弟伝』である<sup>16</sup>。宮崎兄弟とは、言うまでもなく、宮崎八郎・民蔵・弥蔵・寅蔵だが、特色ある思想をいだいて生命を燃焼させた彼らの内でも、とりわけ滔天宮崎寅蔵はアジア主義の生きた「標本」のような人物だった。一九八〇年代なかばから刊行されはじめ、いまなお執筆が続けられているこの巨編は、初期アジア主義史の研究にとっても、かけがえのない貴重な文献なのである。

一つだけ、具体例をあげよう。『大東合邦論』の著者樽井藤吉についてである。樽井は、社会の平等と公衆の最大利益の綱領をかかげた東洋社会党の創立者として名を残したが、その日韓対等合邦の構想は、竹内によって、「空前にして絶後の創見」と称揚された（前掲書、三十七頁）。『大東合邦論』の初版は一八九三年の刊なのだが、樽井は日韓併合の前夜には「日韓聯邦の議」等を発表し、時流に乗った言論活動を行うにいたる。「日韓聯邦の議」は東亜青年会の機関誌『東亜』に載ったもので、上村氏はその残缺を国会図書館で見つけられたのである。「聯邦」を提議する理由として挙げられてい

の研究<sup>17</sup>といった空白をうずめる貴重な労作も発表され、アジア認識を広く扱った古屋哲夫氏の編にかかる『近代日本のアジア認識』が刊行された<sup>18</sup>。

伝記資料としてもっとも大事なのは、『東亜先覚志士記伝』『対支回顧録』『統対支回顧録』を含む<sup>19</sup>である。『東亜先覚志士記伝』は、葛生能久著、黒竜会出版部発行、上中下三冊が一九三四年から翌々年、すなわち「満州帝国」の成立から日中全面戦争開始前夜にかけての時期に編纂、刊行された。いまは、原書房、一九六六年刊の「明治百年史叢書」復刻本がある。下巻には先覚志士、一千十五名の伝記を収める。

『対支回顧録』は東亜同文会の編纂物で、東亜同文会内対支功労者伝記編纂会 代表者中島真雄、の編にかかり、同編纂会の発行である。上・下巻とも一九三六年四月の刊で、二カ月後の六月に訂正再版が刊行され、下巻の「列伝」に約八百人の伝記を収めている。時期的に見て、『東亜先覚志士記伝』に対抗的に出されたことが窺えよう。こちらは同じ編者による統編上下巻が、出版社をかえて一九四一年に出され、下巻「列伝」には二百余人の伝記を収めている。これも原書房から、一九六八年に「明治百年史叢書」として復刻版が出された。

このような大著が二種、日中全面戦争突入の前夜に刊行されたことのもつ歴史的意思是、きわめて大きいといわねばならない。この第一、現今朝鮮を保護国と為すも其保護料を取るにあらざれば、我日本は損するのみにして益する所なし。聯邦と為すに於いては其政費を分担せしむることを得」というなど、以下、かつての『大東合邦論』の提唱者としては目をとおいたくなるような意見を開陳しているのである<sup>20</sup>。

「合邦」と「聯邦」とは、対等性において字義的にはほとんど差違があるものではないのに、まるで逆のものとなったのは、ひとえに樽井がそれに籠めようとした思想内容において変わったからである。その後の日韓併合には心から嬉しがっていたと言われるが、それを示す当時の雑誌論文を見つければ過程での苦心は、まこと敬服の至りである。従来の研究の欠を補いえた上村氏の発見は、「大東合邦論」そのものの思想性を揺るがせないまでも、それを打ち出した思想家樽井藤吉の思想性の有り様を鋭く突くものではあった。

#### 四、アジア主義と大アジア主義

ここで本稿でのアジア主義の用語法について、説明しておこう。同類の語に大アジア主義、汎アジア主義がある。汎アジア主義の「汎」は「泛」の訳語、その使用範囲は帝國主義的政策の方向へと限定的なのにたいし、大アジア主義はかなり無限定に使われてきた。

つまり、アジア主義と大アジア主義なる二つの術語は、「大」の字の有無にかかわらず、人によりさまざまに用いられてきたのであって、両者を区別しうる明確な語義的境界はない。したがって、竹内好氏が前掲の文章で、「大アジア主義」とよぼうと、「汎アジア主義」とよぼうと、その他何とよぼうと、その間に区別を認めることなく、全部一括して「アジア主義」とするとされるのは、一つの見識なのである。

しかし前述したように、同じくアジア主義と言っても、ヨーロッパへの対抗、アジアの振興という点での共通性はもちながら、富強追求路線においては、アジア諸国との対等の関係を前提とした提携路線をあゆもうとするものと、日本の優越を前提とした提携（即抑圧）路線をすすもうとするものとの区別があったことは、けっして否定することのできない歴史的な事実なのである。しかも、それら両者は上述の三時期に、どちらもがさまざまなバイアスをとまなびて登場しているのである。

ゆえに本稿では、前者すなわち対等の関係を前提とするものには、「大」の字のつかない「アジア主義」の語をもち、後者すなわち日本の優越を前提とするものには「大アジア主義」の語をもちいることにする。つまり、「大アジア主義」の語を「汎アジア主義」とほぼ同じ内容に限定して使おうというのである。そして、本稿の題目に見られるように、両者

を「アジア主義」でくくることにする。

この措置は、言うまでもなく、あくまで一つの術語が同一の文章中で場所によりちがった内容のものとして使われることから生じる誤解を、避けんがためのものにすぎない。もちろん、原作者の用法を変えることはしないから、それで混乱が生じうる場合には、適宜限定的な説明をくわえることにする。たとえば、原作者が「アジア主義」と言っても後者の場合なら「大アジア主義」的な「アジア主義」といった説明をくわえる。逆に、「大アジア主義」と言っても、前者の場合なら広義の大アジア主義と修飾することにより、原作者の用法と本稿での用語の統一をはかることにする。広義の大アジア主義の用例として、孫文が一九二四年に神戸で行った演説の題目「大アジア主義」はよく知られていようし、前掲の趙軍『大アジア主義と中国』なる書名での用法もその一例である。

注

- (1) 西洋近代文明との接触受容による東アジア「世界」の変容については、拙編『西洋近代文明と中華世界』（京都大学学術出版会、二〇〇一年）を参照されたい。
- (2) 梁啓超「三十自述」『飲冰室合集』文集、卷十一、十六頁。
- (3) 竹内好編 現代日本思想大系9『アジア主義』筑摩書房、一九六三年。
- (4) 松本健一「竹内好「日本のアジア主義」精読」岩波現代文

- 庫（学術14）、二〇〇〇年。
- (5) 橋川文三「順逆の思想―脱亜論以後―」勁草書房、一九七三年。
- (6) 橋川文三『黄禍物語』筑摩書房、一九七六年；岩波現代文庫（学術24）、二〇〇〇年。
- (7) 酒田正敏「近代日本における対外硬運動の研究」東京大学出版会、一九七八年。
- (8) 佐藤茂教『興亜会報告』と曾根俊虎―興亜会活動に見る曾根の一軌跡―、福地重孝先生還暦記念論文集刊行委員会編『近代日本形成過程の研究』雄山閣、一九七八年。他に関連するものとして、「引田利章の経歴紹介と曾根俊虎に関する若干の史料」『史学』（三田学会会）、第四十五巻第一号、一九七二年。「公文備考」に記載せる曾根俊虎被告事件」同、第四十六巻第三号、一九七五年。
- (9) 安岡昭男「東邦協会についての基礎的研究」『法政大学文学部紀要』第二十二号、一九七七年。
- (10) 伊東昭雄「明治初期の興亜論について―大アジア主義の形成―」『横浜国立大学論叢』人文科学系系列、第三十三巻第三号、一九八二年。伊東氏は、大アジア主義を広義に用いられる。ほかに、「清仏戦争と東アジア・試論―日本人の反応について―」同、第三十七巻二・三合併号、一九八六年。『琉球処分』と琉球救国運動―脱清者たちの活動を中心に―」同、第三十八巻二・三合併号、一九八七年。
- (11) 「日本は東洋国たるべからず」『時事新報』一八八四年十一月

- (12) 『興亜会報告・亜細亜協会報告』全三巻、不二出版、一九九三年。黒木氏の論文は「興亜会の基礎的研究」『近代熊本』第二十二号、一九八三年；「興亜会の成立」『政治研究』第三十号、一九八三年；「興亜会、亜細亜協会の活動」(一)『政治研究』第三十九号、一九九二年、等。
- (13) 並木頼寿「明治初期の興亜論と曾根俊虎について」『中国研究月報』第五百四十四号、一九九三年。
- (14) 中村義「白岩龍平日記―アジア主義実業家の生涯―」研文出版、一九九九年。その前提にある研究として、「アジア主義の系譜」『東京学芸大学紀要』第三部門社会科学、第四十三号、一九九二年、等。
- (15) 趙軍『大アジア主義と中国』亜細亜書房、一九九七年。
- (16) 菅野正「戊戌維新期の上海亜細亜協会をめぐって」『奈良史学』第十六号、一九九八年。なお東亜会に関しては、藤谷浩悦「戊戌変法と東亜会」『史峯』第二号、一九八九年、がある。
- (17) 古屋哲夫編『近代日本のアジア認識』京都大学人文科学研究所、一九九四年。
- (18) 上村希美雄『宮崎兄弟伝』葦書房、「日本篇」上・下巻、一九八四年；「アジア篇」上・中・下巻、一九八七―一九九九年。さらに「完結篇」が準備されている。
- (19) 上村希美雄『宮崎兄弟伝』「アジア篇」中巻、一九九六年、五百三十七頁。